

## 家族へ、友達へ、世界中の仲間たちへ、 そして次の世代へ贈る 手紙”

藤木 悟

団長としてなによりもうれしかったことは、今回の事業を通して団員の皆さんの成長しつつある過程を身近に実感できたことである。一人一人の団員の皆さんは、帰国後研修の時点でもまだまだ消化不良の状態での成長には気づけなかったかもしれない。ただ事前研修時とすべての研修終了時での個々の団員をつぶさに見れば、様々なことを学び経験し多くの人たちと出会ったことによって、たくさんの成長の種が各自の心の中に入りかかり植え付けられたことを確信している。それぞれが時間をかけてその種を育てていくことで、団員の皆さんも自己の確かな成長を実感できる日が必ず来るだろう。

### 1.メキシコでのウェルカムセレモニーの日に-①

メキシコでの公式スケジュール初日は9月19日であったが、この日はメキシコの人々にとって忘れることのできない日である。1985年のこの日、大地震が起こり多くの犠牲者が出た。それ以降、9月19日はメモリアルデーとして全国で防災訓練を実施することとなったのだ。そして2017年のこの日も午前中に防災訓練を終えたばかりの時に、また大きな地震がメキシコを襲ったのである。後日、災害救助犬養成プログラムを訪問した際にも、2017年のその日に救助犬と共に防災訓練に参加していたところ、その直後に地震が発生しそのまま救助活動を行うことになったという話を所長からお伺いした。

私たち派遣団を迎え入れていただいたメキシコ青年庁でのウェルカムセレモニーは、会場に到着したとたんにプレゼントされたソンプレロハットから一気に陽気なメキシコの国民性に満ちあふれ、またメキシカンダンスで私たち団員も一緒に踊られるという大歓迎であった。しかし、そのセレモニーも10時ちょうどに鳴ったアラートで一時中断され、全国一斉の防災訓練が始まった。今回のメキシコ・ペルー派遣団にとっては防災対策を学ぶことが大きなテーマであったが、まさにそれにふさわしい始まりであった。

### 2.メキシコでのウェルカムセレモニーの日に-②

その日の朝、テレビでローカルニュースを見ていた。スペイン語なので内容についてはよくわからないが、昨年就任したばかりのオブラドール大統領がスピーチしている。新大統領は過去メキシコ政界を長年にわたり支配し腐敗にまみれた既存政党の壁を打ち破り、自身が立ち上げた新党(Morena)とともに昨年の大統領選、国会議員総選挙で大勝利を挙げた。メキシコにとって初めてと言える庶民派左派の大統領である。中南米では政治の腐敗や汚職は共通する大きな問題だが、少なくとも新大統領はこの点で既存政治家とは決別していることが高い支持率・人気の根本にあると思われる。就任以来、変革をコミットメントとして掲げ、毎朝1時間には記者会見を行い、週末は広い国土にもかかわらず地方行脚を精力的に続ける新大統領に、私が話をする事ができたメキシコの人たちは大きな期待を抱いている。と同時に腐敗根絶、拡大する貧困層救済・地域格差など長年続く構造的な問題を短期的に解決することは容易ではないとも感じているようであった。

テレビを見ていると新大統領のスピーチだけではなく、手話が使われている場面が多い。初日の午後に訪れた美術館では、展示コーナーごとに手話での説明モニターやメキシコで話されている先住民系言語のオーディオフォンも用意されていた。多民族国家・多文化社会であるが故かもしれないが、障害者やマイノリティーに対する配慮は日本よりも進んでいるようだ。また国会議員の男女比率はほぼ半々であるなど、男女の機会平等については世界の中でもトップレベルである。しかも、2000年頃までは20%以下で日本と大差ないところから10数年で達成していることには驚かされる。

時差ぼけやメキシコシティの2,200mを超える標高の中、昼食はメキシコの慣習ということで15時過ぎから始まり、さらに渋滞で押せ押せとなった初日からのハードスケジュールに加え、スコールの

中でのメキシコ滞在中愛用のミニバン( 団員全員乗るとギョウギョウ詰め!)待ちなどでようやくホテルに戻ってきた時にはかなり疲労困憊状態で、その日の夜は食欲のある団員だけでホテル近くのスターバックスでの軽食となった。そのスタバの一角の席で“Uber Eats”のグリーンのユニフォームを着た男性

4人が歓談している。よく見ると全員手話だ。この日だけでも“手話”に3度も出会ったことが心に残った。

**3 国立災害防災予防センター (CENAPRED) 訪問**  
翌朝9時、愛用のミニバンで出発。少しずつ慣れ

てきた渋滞の中を進む途中、ミニバンのボンネットからきな臭いにおいととも白い煙が出てくる。ドライバーは慣れているようでそのまま進むとするのだが、みんなで車を路肩に止めてもらい緊急脱出。代替の車でなんとか無事に訪問先のCENAPREDに到着した。CENAPREDは

1985

年のメキシコ大地震の後、日本からの無償資金協力や技術協力プロジェクト等の支援を受けて1988年に設立された機関である。現在はメキシコ国内だけではなく、中南米・カリブ地域における耐震建築・地震観測を始めとする防災対策ならびに市民安全を推進する中核センターとして国際的にも高く評価されており、JICAの開発援助の良きパートナーでもある。

メキシコには日本と同様に多くの火山があり、メキシコシティ南東約60kmのところにもポポカトペトル火山(標高5,426m)が位置する。アステカの言語で「煙る山」を意味するらしいが、近年活発な火山活動が続いており、施設内のラボを見学し説明を受けていた時にもモニター画面がちょうどその噴火シーンを映し出した。この程度の小規模爆発は一日に3回ほどのペースで起こっているとこのことで、あらためてメキシコが環太平洋火山帯に属し、我が国と同様に火山・地震災害から逃れられない国であると実感した。だからこそCENAPREDのような機関が果たす役割は重要であり、災害多発国として両国が相互に支援・協力するパートナーとしての連携が、両国だけでなく中南米・カリブ地域にも広がっていることを知り、日本人としてうれしくあり誇らしくも思えた。

#### 4・メキシコ・ペルーの歴史・文化など雑感

両国を訪問することが決まり少し勉強を始めるまでは、中南米の歴史や文化についての知識は

漠然としていた。例えば、メキシコではアステカ文化、ペルーではインカ文化の時代が長く続いていたと考えていた。しかし、実際には両文化の最盛期はスペインによる侵略前の100年ほどにすぎず、様々な文化が興隆、繁栄、衰退を繰り返していたことを知った。そして、メキシコ国立人類学博物館、リマのラルコ博物館などを訪問し、数千年に及ぶ諸文化の豊かな創造性や表現力にすっかり魅惑されてしまった。

スペインによる占領、植民地支配の中でアステカ、インカ両文化に代表される先住民文化の建物や精神的支柱の多くが破壊され、カトリック化による信仰面での融合も数世紀にわたっているが、メキシコでの“死者の日”などには先住民文化の影響が色濃く残っていると感じる。今回の滞在ではメキシコシティとリマにしか滞在していないため、両国の先住民が多く暮らす地方もぜひ訪れてみたい。

中南米では腐敗・汚職が大きな問題であることは触れたとおりであるが、そのこととも符合して政情不安の国が多く治安悪化により国外への大量難民が発生している。トランプ大統領が推し進めるメキシコとの国境の壁も、実はその壁を越えようとしている最近の不法入国者の多くはメキシコ人ではなく、ホンジュラスなど中米各国からの難民である。また政治・経済・社会的混乱が続く世界でも最悪の治安状況と言われるベネズエラでは、人口の1割をはるかに超える430万人が国外へ脱出し、そのうち90万人近い難民がペルーへなだれ込んでいます。両国にとって大量難民の流入や受け入れが大きな社会問題ともなっている。

リマ到着の数日後には、腐敗対策を推し進めようとするピスカラ大統領と国会で過半数を占める野党側が激しく対立し、国会解散を宣言した大統領に対し野党側が別の大統領を指名し二人の大統領が並立するという異常事態となった。そのため翌日予定していたリマ中心街・旧市街への訪問はキャンセルせざるを得なかったが、団員の皆さんにとっては今回の両国での滞在中を通じて、中南米における腐敗・汚職や難民問題の現状を知り、安定した政治の重要性について認識する良い機会となったはずである。

#### 5・ペルー日系人協会 (APJ) 訪問

ペルーには10万人ほどの日系社会が存在するといわれているが、APJを訪問してなによりも現地

での日系コミュニティの強いつながりを実感した。APJの神内プログラムでは、平日毎日70-80名の日系シニアの方々に様々なサービスを提供しており、私たち派遣団も飛び入りで参加した。まずは

「ソーラン節」を元気いっぱい踊り、次は上を向いて歩こう」を歌うと一緒に口ずさむ人もいて心も弾み、最後にシニアの皆さんと一緒に踊った盆踊りでは和やかな輪が広がった。その後訪れた別のフロアでは、日系シニアの皆さんと折り紙で鶴と一緒に折りながら楽しく触れあいの時間を過ごすことができた。

さらにAPJが運営する総合診療所、劇場、道場、図書館、日本語教室などの諸施設は、日系人だけではなく広く一般市民にも開放されており、ペルー社会に大きな貢献をしていることはうれしい驚きであった。道場では空手の稽古をする小さな子供たちの掛け声に思わず頬が緩み、劇場の周りにはパフォーマンスの順番待ちなのだろうか、たくさんの現地校の生徒たちで活気にあふれていた。

最後に日本人ペルー移住資料館を訪れた。今年はペルーへの日系移民120周年という記念すべき年でもあるが、ここはその苦難に満ちた日系移民の歴史を学ぶ場所でもある。移民初期には借金をする信用もなく頼母子講」という独自の金融互助システムで日系人同士が団結して支えあってきたこと。第二次世界大戦中には日系人に対する排斥や弾圧が強まり、およそ2,000人の日系人がアメリカの強制収容所に強制移住させられたこと。そのほとんどの人が不当に財産や地位をなく奪われたためにペルーに戻ることができなかったこと。このような苦難の歴史を経験しながらも、開かれた日系コミュニティとしてペルーの人々に貢献しその信頼を築いてこられた日系人の皆さんの努力と忍耐に尊敬の念を抱かざるを得ない。

## 6 日本・ペルー地震防災センター (CISMID) 訪問

CISMIDは日本の協力により、1986年にペルー工科大学内に設立された都市防災計画や防災技術の研究・普及等を行う機関である。CISMIDはメキシコのCENAPREDと同様にJICAの良きパートナーであり、ペルーのみならず広く南米の各国に地震防災を中心とした各種の自然災害の防止を図る研究とその成果の普及を促進するセンターとして大きく貢献している。お会いした所長を始め多くの関係者が日本での留学や研修を経験

さ

れており、活発な人的交流が長年にわたり継続している層の厚さを感じた。

またセンター内には日本から無償供与された起震車があり、1970年に約7万人が亡くなったペルー大地震、阪神・淡路大震災、東日本大震災などの揺れが体験できる。それぞれの地震に特徴的な揺れ方があり、じっと立っていることさえできない揺れがあることを団員の皆さんと一緒に身をもって体感した。

## 7 SWYAA (Shipfor World Youth Alumni Association)

今回の滞在中、メキシコでもペルーでもSWYAAのメンバーと会い話しをする機会があった。2020年2月には「世界青年の船」事業でのメキシコ訪問が予定されており、メキシコのメンバーは現地で事業のお手伝いができることをうれしく思い、たくさんの人をお迎えすることを楽しみにしていると笑顔で話してくれた。

また今回の私たち派遣団のペルー訪問については、SWYAAペルーの皆さまにほぼ全てのことをサポートしていただき心から感謝申し上げたい。リマでの歓迎夕食会で同席した数名のメンバーの方々に、なぜ私たち派遣団をこのように歓迎しフルサポートしてくれるのかと尋ねたところ、SWYでお世話になった日本人たちへ少しでもお返しをしたいからと話してくれたことは忘れがたい思い出である。SWYAAペルーだけでも百数十名のメンバーがおり、過去数十年にわたって日本政府が継続してきた青年育成交流事業のネットワークが着実に世界中の国々に根付いて活発な交流を続けていることを実感できたことは貴重な経験であった。

## 8 おわり

体調不良のためペルー滞在中に病院で治療を受けた団員が、体調を崩して大変だったけれどもその時に同行してくれたペルーの方が親切で彼らの優しさに触れることができたこと、そして地球の裏側にも気持ちの通じ合える人たちがいることを知ることができたことは、本当に良い経験でしたと話してくれた。これを聞いた時には私もうれしかったが、団員の皆さんが苦しい時に差し伸べられたこのような優しさを忘れずに、周りの人に自らの優しさを分け与える人になってほしいと願っている。

そして自分自身の成長を周りの人々の成長と幸せのために役立てることこそが、自分自身の人生を豊かで喜びに満ちたものにするのだと伝えたい。

団員の皆さんにとって、今回の事業はリーダーシップとは何かを考える良い機会でもあっただろう。リーダーとしての究極のゴールは“チームでの成長と成果”であり、言い換えればまさに“自分自身の成長を周りの人の成長と幸せのために役立てること”であると私自身は考えている。今回の事業を通じて団員の皆さんの心の中に播かれた種がやがて芽吹き、いつまでも消えない“ロウソクの灯り”として輝きを増す時、そしてその灯りが周りの人た

ちの心を照らし、彼らの心の中にも新たな“ロウソクの灯り”がほのかに点り始める時、成長した皆さんの姿を見てみたいと思う。

最後に本事業を主催、支援していただいた内閣府の皆さま、青少年国際交流推進センターの皆さま、ボランティアの皆さま、また現地でご支援していただいたメキシコ青年庁、SWYAAペルー、日本大使館、JICA、コーディネーター、ホストファミリー、関係諸機関などの皆さまにこのような貴重な経験の機会を与えていただいたことに対して心から感謝申し上げたい。

## 「何のため」の派遣か

### はじめに

まず、この事業にメキシコ・ペルー派遣団の団員として参加できたことに心からの感謝を述べさせていた だきたい。事業参加中、私たち派遣団は様々な場所を訪れ、様々な人に出会い、この事業でしかできない経験を多く積むことができた。一方で、この事業への参加が決定した時から事業終了まで、そして終了後の現在も含め、ずっと自身に問いかけてきたことがある。それは、私は一体何のためにこの事業に参加させていただく機会を得て、何のために学ぶのだろうかということである。派遣事業を終えた今、いよいよ その答えを見出すべく、この報告書に事業中に得た学 びを記し、それらを今後ずっと問いかけていくのであ ろうこの問いに対するヒントとしていきたい。

### 災害対策と国際協力

本年、天皇のお代替わりを記念してリニューアルされたこの事業の最大の特徴は、各派遣団に学びのテーマが設定されたことだと思う。私たちメキシコ・ペルー派遣団のテーマは「災害対策」であり、派遣期間中には各国の災害・気象に関する研究機関や大学を訪 問させていただいた。その中で一番の学びは災害対策と国際協力の関係性である。派遣前の私は災害対策というのは各国の政策によって行われるものであり、その国それぞれの特徴があるように思っていた。しかし 実際にメキシコ・ペルー両国の研究機関を訪れ、それが間違いであることに気づいた。両国で訪れた研究機 関の多くは、日本を含む外国からの援助で建設されたものであった。現在は国のみで運営されている施設に 関しても、その開設段階には他国の援助が関与していることが多かった。そのほかにも、例えばJICAはペ ルーが自然災害により甚大な被害を受けた際には100 億円を上限として資金供給をするという借款貸付制度を持っている。その国の災害対策を中心となって進めるのは国家であることに変わりはないが、技術的、また金銭的な援助はむしろ、防災先進国と呼ばれる日本の使命として捉えられているように感じた。ただし、こ

のような国際協力においては、単純な技術移転のみでは不十分である。また、日本がこれまでに歩んできた災害対策の道のりをただ外国に当てはめればよいという問題でもない。これは 災害に関するもののみならず、国際協力の分野すべてに言えることであると思うが、各国それぞれに抱えている課題があり、異なる文化的特徴があるということを理解しなければならないことを改めて実感した。

### 災害対策と貧困

メキシコ・ペルーで災害対策を進める上での特徴として最も 重要なのは、いまだ貧困が残る地域もある中で災害対策を進める必要があるという点だと思う。ペルーで災害に強い建物構造の研究を行う機関を訪 問した際、衝撃を受けたことがあった。その研究機関のすぐ後ろに大きな砂山があり、その斜面に板のような素材でできた質素な家が所狭しと並んでいるのである。ペルーでは、そのような場所をいたるところで目撃する機会があった。研究機関の方々によれば、それはいわゆる貧困地域で、建っている家は住んでいる人自身が建てたものであり、法律の防災規定を満たしていないということだった。災害が起きた時にその建物が危険であることはわかっている。しかし、だからといって誰もが災害に強い家に住めるわけではない。その矛盾を目の当たりにし、これからの世界における社会課題の解決がどれほど難しいのかを痛感した。これまでの世界では、社会課題の解決には、まず貧困問題を解決し、そのあと健康、災害対策、教育制度を充実させていくというように、ある程度の段階のようなものが あったと思う。しかし、災害対策が急がれている中で、 そのような段階はもはや通用しないのではないかと思 った。貧困問題に取り組みながら保険制度を整え、技術導入も進め、あらゆる制度を同時に整えていくことが求められているように感じ、それがペルーで私たちが感じた矛盾の根源なのだと考えた。果たして私た ちはこの問題に何かの形で貢献できるのだろうかという思いに迫られた。

## 異文化への寛容性とは

メキシコ・ペルーの災害対策の特徴としても1つ学んだ点が、異文化への寛容性である。それを最も強く感じたのはメキシコの国立地震局で教授からレクチャーを受けた時であった。メキシコで次に地震が来ると予測されているエリアでの、人の避難速度を地図上でシミュレーションし、映像化したものを見せていただく機会があった。教授はその時に、観光客が周りの行動を見て同じように避難することも考慮してシミュレーションしているとおっしゃっていた。

私はこの学びを通し、多くの民族や異なる国から来た人を何の違和感もなく受け入れることこそが、メキシコという国の文化なのではないかと考えた。この、異文化への寛容性は災害対策に関する学び以外に、現地青年との交流の中でも実感する機会が何度もあった。例えば、徒歩での移動中や少し時間が空いた時など、メキシコ青年たちはよく「これは日本語で何と言うの?」とか「こういう文化は日本にもある?」など、日本の文化に関する質問を多く投げかけてくれた。たとえ価値観が全く異なる点があっても、面白そうに聞いてくれることがほとんどで、そういった異文化に対する好奇心こそ異文化交流の原点であると感じた。これは海外の方との交流のみならず、人と人との関わり合いにも通じることだと深く思った。異なる価値観を受け入れるのは時に難しいが、より柔軟に「そういう考え方があって面白い、勉強になる」という発想を持つことができた時、初めて1人の人と向き合えたと言えるのだろう。その積み重ねがまさに国際交流なのではないかと考えるきっかけとなった。

## 何のための派遣か

さてここで、この事業参加中にずっと聞いてきた「何のための派遣か」という問いについて、今私が考えていることを記しておきたいと思う。今の私は「なぜここにいるのか」「なぜこの派遣団の団員として参加させていただいたのか」という問いを持ち続けることができたこと自体が、この事業に参加させていただいたことで得られた最大の価値であったように思う。

また、それぞれ異なる大学・企業から集った12名の団員で海外に行くという経験も、私の人生にとって本当に貴重であったと思う。派遣期間中、ホテルの一室で数人の団員とともにこの「何のために」という目的観を何とか見出そうと長時間話したことも、今の私にとってかけがえのない時間になっている。今後、さらなる学びやさらなる経験を重ねる中で、より明確にこの価値を理解できるようになっていきたいと思っている。

## 今後の活動について

事業参加青年として、今回学んだことを生かし、自身の所属するコミュニティや大学に何か貢献しなければならぬとの思いから、3つの取り組みを行いたいと思う。1点目に、大学で現在所属するプログラムにて報告会を行いたい。この度学ばせていただいた「災害対策と国際協力」「災害対策と貧困」そして「異文化への寛容性」という点、また、なぜ学ぶのかと問い直すことの重要性について、共有し、意見交換をしていきたいと思う。2点目に、自身が現在所属している大学の国際寮にて、留学生と日本人学生を交えた防災に関するガイドライン作りに取り組んでいきたいと考えている。出身国では自然災害に遭ったことがないという留学生も多くいるため、災害大国と呼ばれる日本で暮らすために必要な防災教育は寮内でも行うべきだと思っていた。そこで、今回学ばせていただいた異文化への寛容な防災を生かす場所として、今住んでいる寮生はもちろん、今後住む寮生にとっても必要となるガイドライン作成を行うことにした。また3点目として、こちらはすでに始めたものであるが、授業を通して防災に関するさらなるリサーチプロジェクトを実施していくことにした。現在履修している授業で、日本における課題を何か1つ選定し、それに対して活動している団体にインタビューをするなどしてリサーチを深め、最終的には英語による授業内プレゼンテーションとリサーチペーパーの作成に取り組むプロジェクトがある。そこで私は、日本における外国人への防災教育をテーマとして選び、現在リサーチを進めているところである。この授業を通して自身の中でより深く防災に関する意識を深め、学んでいきたいと思う。

## おわりに

私が今回この事業に参加させていただいて気づいたのは、自分の行動は世界の何に貢献できるのか、今学んでいることは何に役立てることができるのかを考え続けることの重要性である。幸運にも今回この事業に参加させていただき、大切な仲間と出会い、多くのことを学ばせていただいた責任を果たすべく、今後も学びの根源である「何のため」という目的観を忘れず、学んでいきたい。

最後に、この事業に参加させていただいたことへの感謝を示すとともに、内閣府の皆様、青少年国際交流推進センターの皆様、団長・副団長、団員、支えてくださったすべての方々にもう一度、心からの感謝を表させていただきます。

## 繋がり

今回私は、中南米派遣団として、災害対策分野においてメキシコ合衆国およびペルー共和国への派遣を経験した。参加にあたり掲げた個人テーマは、「災害時における感染症対策への獣医学的アプローチ」である。災害対策というテーマを理由に本事業に応募した私にとって、派遣国はどこでも良かったというのが当初の正直な思いだった。しかし、私の出身地、千葉県は日墨の交流が始まった場所であり、居住地である山口県は、ペルーに移住した最初の日本人の出身地であるという事実を知ったとき、偶然ではない何か私を中南米に繋いだような気がした。

印象に残った体験は二つある。一つは、中南米の人々の心に触れたことだ。ペルー滞在中、残念ながら体調不良により別行動となったが、その中での出会いと交流はかけがえのないものだった。

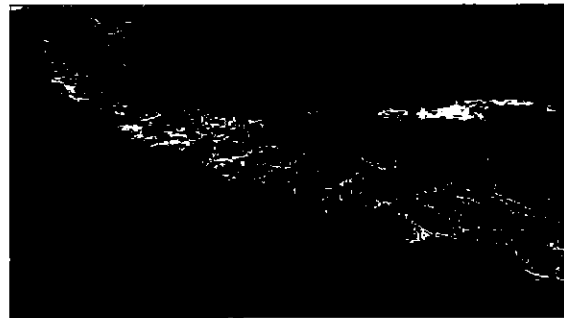
“Every day SWY Spirit.” 病院に同行して下さったSWYAAの方の言葉である。日本が教えてくれた「絆」の温かさを、出会ったすべての人に与えたい、その信念が内閣府事業への参加から何年経った今でも、日々彼の心を突き動かしているという。事業から派生した草の根交流によって、参加青年以外にも日本人の心が語り継がれていることを知り、一日本人として嬉しさを感じた。

帰路の機内では、私が腹痛に苦しんでいると、ペルー団員がお手洗いに並ぶメキシコやペルーの一般の方々に協力を呼びかけてくれた。伝言はあつという間に人の壁を越え、皆笑顔で私を優先して下さった。申し訳なさと感謝を伝える私に、見知らぬ女性が“Familia (家族)”と声をかけて下さった。やわらかくもあり、そして強くもある、そんな中南米特有の人と人の繋がりに大きく心を揺さぶられ、思わず涙があふれた。

辛かったはずのペルー滞在中も、振り返ると浮かんでくるのは良い思い出ばかりだ。それは、初めて出会った私に、彼らが心からの愛と優しさを分けてくれたから、そして遠く離れた地球の裏側に、こんなにも心を繋ぐことができる人がいることを実感できたからだと思ふ。

もう一つは、ホームステイを通してペルーという国を

深く理解したことである。ホストファミリーに、ペルーの自然を見たいという希望を伝えたところ、リマ郊外の海へ連れて行って下さった。自然の宝庫ペルー、そこに広がるのは、美しい海と穏やかな港町—そんな光景を思い浮かべていた私にとって、目の前に広がる景色はひどく衝撃的だった。岸边に見える漂流物の数々、東京湾となんら変わらない濁った黒色の海。ここは本当にペルーなのか、しばらくの間、現実を受け入れることができなかつたのを鮮明に覚えている。



ペルーの海

これも運命なのか、私のホストシスターは環境工学の専門家だった。ペルーでは、銀の採掘による大気汚染が深刻な問題であり、それが海洋汚染に繋がっているという。また、鉱山は熱帯雨林地帯にあるため、採掘は同時に生態系の破壊を招いている。しかしながら、採掘による利益を望む政府は、企業や鉱山地域の政治家と癒着しており、たとえ環境保護の声が市民から高まったとしても、事態の解決は期待できないそうだ。実態解明のため環境活動家が熱帯雨林でフィールドワークを行おうとしても、そこは人身売買の頻発地域であり、足を踏み入れることはできないという。私は中南米の政情を理解していたつもりだったが、汚職が一般市民の生活環境にこんなにも直接的な影響を与えているという事実に、驚きと戸惑いを隠せなかつた。

この数日後、ペルーでは国会が解散され、二人の大統領が存在する事態となり、治安悪化のため我々のリマ旧市街への訪問は中止となった。この国の良くない

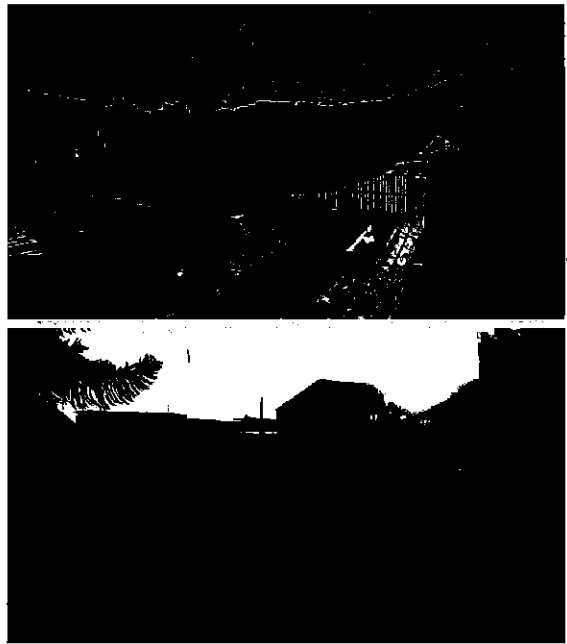
ところはただ一つ、政治だ」と昨日まで嘆いていたホストシスターが、一転して「この国の歴史が変わるかもしれない」と目を輝かせていた姿が忘れられない。タクシーの運転手も絶え間なく政治について語っていた。自国の未来に期待し、パワーに満ちる彼らの語気を前に、不安定な政治こそがこの国の発展を妨げていると 思えてならなかった。

ペルーでは、私立と公立の学校教育の格差が深刻な問題である。ホストシスターは、公立教育を受けて育ったそうだが、本人からその事実を聞かなければ気が付かないほど、彼女の学識や英語力は長けていた。置かれた環境に屈せず、自分の道を切り拓いていく彼女の強さは尊敬すべきものである。そして、政治を筆頭にコネクションが重視される国においても、地道に努力を重ねる彼女のような存在が評価されるコミュニティがあることを知り、この国の変革への可能性を感じた。

環境工学と獣医学。縁遠いように思える学問を専攻する私たちを繋いだのは、生態系と越境性という二つのキーワードだったように思う。環境問題や感染症問題は、どちらも国を越えて影響が広がるため、国際協働が欠かせない。国をまたいだ支援をする際、自国の技術や方針をそのまま相手国に導入することは難しい。相手国に合ったやり方を現地の人々と共に構築し、協力の線引きもしなければならない。」これは JICAペルー事務所職員の方の言葉であるが、私が国際協力のあり方について考え直すきっかけとなった。この言葉の根底にあるのは、国、文化、価値観の違いすべてを受容し共生を目指す JICA の理念であり、なぜ JICA が国際的な評価を得ているのかを如実に表しているように思えた。そして、支援者がすべきことは課題解決のための基盤となるシステムを作り、相手に意志を繋ぐことであり、それを土台に課題解決に取り組むのはあくまで相手側であるということに気付かされた。将来、自分が感染症制御に関わる国際的な場に置かれたとき、常にこの言葉を念頭に行動したいと思った。

ホストファミリーの家は、リマ郊外の小高い山の上にあった。急斜面に林立する家屋の光景は、市街から見上げるとある種芸術的なのだが、実際足を踏み入れるとそれは恐ろしく異様なものだった。地震が発生すれば間違いなく崩壊してしまいそうなのだが、ホストファミリーをはじめそこに住む人々は、きっと大丈夫だと 言っていた。居住者の災害への意識を変えない限り、災害対策を進めることは容易ではないと実感した。

メキシコ・ペルー 両国は、技術支援により災害予測や 研究は進んでいるものの、災害に対する専門家と一般



急斜面に並ぶペルーの家屋

市民の認識の乖離は、深刻であった。9月19日—1985年、2017年にメキシコで大地震が発生したこの特別な日に、我々も実際に国主導の避難訓練を体験した。だが、これは人々がビルに集まるだけの形式的なものであった。そこには日本のように避難場所で指示を出す人がおらず、実際に避難経路を確認するなどの訓練もなかった。メキシコ型の避難訓練を経験して最も感じたのは、災害時にリーダーシップを取り、指示を出すことのできる人材の欠如であった。災害予測の技術だけでなく、有事の際の人材育成に国としてより一層力を入れる必要があると感じた。そして、専門家育成のためにも、一般市民に防災の概念を浸透させるためにも、まず私たちがすべきことは教育であると痛感した。

本事業における私のテーマは、「災害時における感染症対策への獣医学的アプローチ」であった。災害時の衛生状態の悪化や、避難場所での過密に伴う感染症に対する国際的な制御について、公衆衛生獣医学的な観点から理解を深めることを目的とした。

ペルーでは、災害時に大量の負傷者の受け入れが可能な病院が限られていること、また病院に耐震構造が適用されていないことが当面の深刻な課題であり、災害医療と言っても予防という概念は無いに等しい。また、感染症の重大性の認識も低いのが現状であった。派遣において私が学んだ最も重要な事実は、国境を越える問題が、必ずしもその地域で優先順位の高い課題であるとは限らないということである。そして、先に



述べたような理想的なJICAの国際協力のあり方からいかに自分が遠く、一方的な問題解決を行おうとしていたかに気付かされた。問題に立ち向かう策を考える前に、我々は共通認識を持つことから始めなければならない。一つは、問題が及ぼす地球的規模の悪影響に対する認識。もう一つは、国際社会が協働して問題に対処する必要があるという認識だ。災害時の感染症の蔓延は、国際的な脅威となりうるが、麻疹などの感染症は、ワクチンさえあれば広がりを抑えることができる。だからこそ、一般市民への保健教育の徹底は重要であり、政府主導で接種率向上のためのプログラムを進める必要があると強く感じた。

国際青年交流会議では、Youth Powerという言葉をあちこちで耳にした。そして、人はそれぞれ人生の使命が異なるのだと知った。分野は多様であるものの、海外青年に共通していたのは、だれもが夢と信念、情熱にあふれていたこと、そしてそれを力強く語る姿だった。その姿を見て悔しさに駆られたのは、素直に彼らが羨ましくてならなかったからだ。それが、日本社会が挑戦に不寛容であり、身の丈に合わない夢を語ることが憚られる場所だからだと気付いたとき、私はやるせない思いでいっぱいだった。同時に、こんな社会を変えなければいけない、そして私はチャレンジャーであり続けたいと強く思った。ただ獣医師になるだけでなく、より良い世界と未来のために、私は獣医学を介して何ができるのか、自分の存在と人生の意義を見つめ直す機会を海外青年たちは私に与えてくれた。

私は、一人の獣医師として、そして一人の人間として人生を歩みたいと考えている。獣医師としての目標は、第一に、災害獣医学という分野を確立させることである。災害時における獣医療の役割は、動物の救護活動はもちろん、感染症対策、公衆衛生、野生動物問題など多岐にわたる。だが、日本では未だ災害獣医学という分野が未確立である。まずはこの分野への獣医学生や獣

医師、動物看護師、研究機関、行政の関心を高めなければならない。そのために現在私が活動している国際獣医学生協会において、本事業で培った経験や災害獣医学に関する情報発信を始める予定である。

第二に、長期的な人生の目標は、人獣共通感染症の制御に従事し、世界の公衆衛生水準の向上に貢献することである。災害時の感染症問題を解決するには、まずは平時における公衆衛生水準を上げる必要がある。帰国後、私は獣医公衆衛生学研究室への所属が決まった。まずは今後3年半、細菌研究に励み、感染症分野で活躍する獣医師になるための基礎を積み予定である。卒業後は、感染症分野の最前線に立ち、水際防疫に従事する検疫官になることが目標だ。

最後に、一人間としての目標は、中南米と関わりを持ち続けることである。派遣で出会ったすべての人が教えてくれた優しさに、何か恩返しとなる活動ができないかと思ひ、帰国後、山口県ペルー協会に所属した。民間ボランティアからなるリマの消防団に、山口県で使用していたレスキュー車を寄贈するなど、精力的な活動を行っている団体である。今後、物資だけでなく技術研修面での人的交流の推進につながるよう、活動していきたい。このような民間レベルでの地域貢献に参加することで、日本とペルーの友好と相互理解の一助になりたいと考えている。なお、メキシコとの関わり方は現在模索中である。

災害対策の専門性を深め、自分のキャリアに生かすため—それだけが私の応募の動機だったが、派遣を通して何よりも知ったのは、中南米の人々の優しさ、そしてリーダーとはより良い世界のために自分の力を生かす存在であるということだった。たくさんのお会いが生んだ繋がりと学びを原点に、国際社会で活躍する一人の獣医師、一人の女性を目指して人生に挑戦していきたい。そして、世界のあちこちに、情熱を持ち、夢に向かって走っている仲間がいることを忘れずにいたい。

“Every day INDEX Spirit.”

# ディスカッション成果 令和元年度 メキシコ・ペルー派遣

## 1. メキシコ国立気象局におけるディスカッション概

要	9月23日
	国立気象局 (メキシコシティ)
	日本・メキシコ両国の災害対策
	日本青年12名、メキシコ専門家3名
	12:30-13:30 意見交換会

## 成果

### 1. メキシコの現状

#### < 貧困地域での防災 >

- ・ 貧困地域が今もなお残っており、その地域への災害時対応が問題となっている。特に農村部では民族の違いなどから言語が異なる場合も多く、一斉に情報発信することが難しい。
- ・ 国立気象局はGoogleと協力して情報発信を行おうとしているが、インターネット接続ができない地域ではそを利用することができない。
- ・ インターネットやメディアなどで情報を伝達できない地域の住民には人が直接情報を伝えに行き、間に合わなかった場合は救助するという体制をとっている。

#### < 防災教育 >

- ・ 学校教育としての防災訓練や防災に関する教育はない。
- ・ 国全体で年に一度、地震に対する避難訓練があるが、津波やハリケーンに対する訓練はない。

#### < 災害対策と国際協力 >

- ・ JICAからの技術協力を受けている。
- ・ 日本との協力よりもアメリカやヨーロッパとの情報共有が多い。とくにアメリカにはワシントンD.C.に大きな機関があり、メキシコも含めて100を超える国々の災害情報が集まり、そこから発信されているため、非常に重要である。

### 2. 日本の現状

#### < 貧困地域での防災 >

- ・ メディアへのアクセスが全くできないという地域はないため、どの地域へも同じようにテレビやラジオ、防災無線でのアナウンスが流れる。

#### < 防災教育 >

- ・ 日本での防災教育は小学校から行われており、どの学校でも大体年に3回ほどの防災訓練がある。
- ・ 台風に関する防災訓練は基本的にない。
- ・ 学校教育を日本で受けていない外国人が増える中、日本で災害にあったときの避難の仕方や防災に関する知識が不足している外国人在住者が多くいる。

#### < 災害対策と国際協力 >

- ・ 防災先進国として、JICAを中心に他国への技術援助を進めている。

### 3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- ・ 貧困地域の有無の差はあるが、言語対応への取り組みが今後必要であるという点については日本もメキシコも同様であると気づいた。防災と異文化理解は結び付く必要があることを学んだ。
- ・ 両国ともハリケーンへの防災教育がまだ不足していると感じた。今後は、自然災害種別ごとに、それぞれに安全な場所を考えるなどの教育が必要になってくる。
- ・ 災害対策と国際協力は密接に関連しあっており、他国との協力によって情報共有をしたり、技術面・資金面での援助をしあったりすることによって世界全体の防災レベルを高めていくことが必要であると考えた。

## 災害対策グループ感想

今回私たちが訪れた国立気象局は1877年に設立され、主に天気予報、嵐や大雨の際の警告などを行っている機関である。同機関は1947年に世界気象機関に加盟し、現在では、アメリカ国立ハリケーンセンター、世界気象機関と連携して、ハリケーンがメキシコに与える影響の予測などを行っている。

ディスカッションは気象の専門家を交えて行われ、彼らとの意見交換を通して防災教育の大切さを改めて感じることができた。日本では学校での避難訓練を通して、地震が起きた時には身を守るために即座に机の下に潜ることが常識になっているが、有事の際に落ち着いて避難行動を当たり前に行えるように、繰り返し学び災害に備えておくことが非常に大切なのだと強く感じた。一方で、日本とメキシコは共通して、台風やハリケーンへの防災教育が地震に比べて進んでいない。私自身、地震の避難訓練は何度も経験したが、台風の避難訓練は経験したことがなかった。近年、地球温暖化の影響で台風やハリケーンの数が増え、それぞれの規模も大きくなっているという中で、それらへの防災教育が急務であると感じた。

また、経済的または言語的理由で災害の被害を受けやすい災害弱者のための対策について話し合ったことが印象的だった。メキシコで貧富の格差を目の当たりにし、且つメキシコで自分達が外国人となったからこそ、こうした視点での議論が行えたのだと思う。日本とメキシコは共通して、災害弱者への対策が不十分である。こうした人々は社会全体で少数派となることが多いが、災害弱者の視点に立つことを忘れてはいけないと改めて感じた。

日本とメキシコは災害対策に互いに課題を抱えており、こうした課題の解決のために、災害対策における国際協力は非常に有効だと考える。メキシコ国立気象局は JICA や欧米の機関と連携しているとのことだったが、災害予測の技術や情報における連携が多いように感じた。災害予測はもちろん大切だが、災害が起きてからどう対処すべきかを知っていることが非常に大切である。災害発生後の対策においても、日本の避難方法を海外に発信したり、共通の課題について話し合ったりと、国際協力を強化していくべきだと感じた。



## 2・ペルー国立工科大学におけるディスカッションの概

要	10月1日
	国立工科大学-CISMID (リマ)
	日本、ペルー両国の災害対策
	災害研究と現実との差、防災教育、国際協力、東日本大震災
	日本青年12名、ペルー専門家3名
	11:15-11:45 意見交換会

### 成果

#### 1・ペルーでの現状

##### <災害研究と現実との差>

JICAの技術協力により免震技術の研究が行われているが、実際にペルーで免震構造を持つ建物の全建築物に占める割合は約1%にとどまっている。現段階で地震が発生した場合、崩壊の恐れが高いものが多い。また、山岳部の急斜面に家屋が並んでいるが、政府はこれを取り締まるための効力のある法律を有していないことから、実際には災害対策があまり進んでいないという現状がある。道路に関しては、都市中心部では整備が進んでいるものの、郊外ではアスファルト等での整備が不十分で危険な状態である。

##### <防災教育>

小中学校において教育の一環として行われているほか、全国規模の避難訓練が2010年以後毎年行われている。また、5月31日をペルー全国避難訓練の日としている。地震の発生メカニズムなど災害そのものに関する教育は行われていない。そのため、市民の多くは揺れが生じて、何が起きているかわからないまま家の外に飛び出しているという実情がある。

##### <国際協力>

CISMIDはJICAの支援のもと設立されたため、施設には至るところにJICAが寄贈した設備が見受けられた。現在では、ラテンアメリカ唯一の地震工学研究所として、南米地域における防災研究の中核的立場も担っている。メキシコ国立災害予防センター(CENAPRED)との共同研究も行っている。

#### 2・日本での現状

##### <東日本大震災>

日本で甚大な被害をもたらした東日本大震災に関して議論を行った。東日本大震災は地震そのものの被害だけでなく、津波や原発事故など二次的な被害が大きかった災害である。三陸新報が出版している記録写真の書籍を日本から持参し、写真を見ながら被害の認識を深めた。行方不明者の名前が並んだ回覧板は、ペルーには無い習慣であった。

##### <防災教育>

日本では、9月1日を防災の日と定め、国をあげての防災訓練を行っている。学校教育の一環として、小学校では集団避難・集団下校を含めた訓練が行われている。また、地震の発生メカニズムと、避難の際にとるべき行動をリンクさせた学習が義務教育に含まれている。

##### <国際協力>

日本は防災先進国として、JICAを中心に他国への技術援助を進めている。

#### 3・上記現状から学んだこと・気づいたこと

今回のディスカッションにより、ペルーにおける災害研究の現状について学ぶとともに、日本国内における災害対策の実情を再確認するきっかけになった。ディスカッションを始めるにあたって施設見学を行ったが、地震体験車などの防災教育設備もあり、日本が世界に発信している防災技術や知識が、南米地域においても同様に利用されていることを知った。また国立工科大学には、日本から大学教授や専門家が数名派遣されており、日本が防災先進国として世界で担っている役割の大きさを実感することができた。

ディスカッションに参加した現地の専門家の一人は、来年日本へ留学し、災害対策に関する研究を日本で進めるといふ。技術や設備をただ物資として提供するだけでなく、専門家をはじめとする人的交流の促進を合わせて行うことによって、両国における今後の防災研究の進展と、防災教育の普及が期待される。

## 災害対策グループ感想

国立工科大学の日本・ペルー地震防災センター(CISMID)は、JICAの支援を受け1986年に発足した、地震とそれに伴う二次災害の軽減のための研究とその成果の普及を目的とした研究施設である。ここでは、研究所や実験装置の見学をした後、日本青年と研究者間で意見交換が行われた。

CISMIDの研究者の大半は日本の大学に留学して地震学を研究した経験を有しており、日本の地震について理解が進んでいた。その中で聞かれたのが、阪神淡路大震災時に神戸を訪問した際、地域全体で危機的状況に対応していたことに感銘を受けたという意見だ。ペルーでは災害時には全体で協力するという考え方はなく個々に対応するのが普通で、地域の連帯は日本の国民性ならではの大きな強みであるとわかった。昨今、日本では地域コミュニティの衰退が叫ばれているが、決して密接な近所づきあいでなくとも、何かの緊急時には助け合えるように日頃から近隣住民と関わることを怠ってはならないと感じた。

研究が活発に行われていることを感じる一方、日本とは異なる社会状況によって住民に還元されていない現状もあった。例えば、ペルーでは山の斜面に住宅が違法に建築されていることが問題となっており、これらは見るからに脆弱で地震や土砂崩れが起きると即時

に壊れてしまう。政府はそれを認識しているものの、国土が狭く住む土地が不足していることなどが影響して対応が進んでいないようだった。また、免震構造の研究も行われていたが、実際にペルーで免震構造を持つ建物は約1%にとどまっていた。社会的な背景によって、研究成果をうまく生かしていないことに私はもどかしさを感じた。ただ、研究者の話を知っているとこれからさらに良いものにしていきたいという姿勢を強く感じ、防災対策に対する明るい未来を感じ取ることができた。

私たち人間が自然災害から完全に逃れることは不可能である。特に日本とペルーはともに自然災害が多く、近い将来に大きな災害が起こることも否定できない。それでも、災害による被害を少なくすることは可能だ。被害を最小限にできるよう、CISMIDを中心に、二国間での国の垣根を越えた研究が今後も活発に行われることを期待している。それとともに、専門家の研究成果が十二分に生かされるためには、地震への意識、事前準備、避難訓練、地震が起きた時の対応など、これまでの自分の取り組みを改めて見直すきっかけとなった。

